

# 山びこ通信



ラテン語

ロボット工作

しぜん イタリア語 ラテン語 ウェブプログラミング  
 歴史 ギリシャ語 かが 調査研究 理科 数学  
 ことば つくる ユークリッド幾何 山の学校ゼミ(社会)  
 英語 かず フランス語 ロボット工作 漢文 ロシア語

## Less is more — 十年目の挑戦

文・山下太郎

表題のカナ表記は「レス・イズ・モア」。著名な建築家のモットーとして知られる言葉である。「少ないことは多いこと」。過剰を諷め簡素を尊ぶ美意識が、わずか三語で表現されている。和歌や俳句の例を挙げるまでもなく、この美意識は古来日本文化の伝統を貫く精神であった。だが、今はどうか。

飽食の時代と呼ばれる昨今、表題の言葉は多方面で示唆を与えるように思う。エネルギー問題に関しても、膨れ上がった人間の欲望をどうコントロールするかという問題と無関係ではない。話を教育に限っても、「過剰」は至る所で目につくだろう。子どもたちを取り巻く環境は「自然」から遠く、無駄を通り越した電気じかけと装飾に満ちている。

他方で「過干渉」や「過保護」の問題もある。今はこれらが「問題」ではなく「日常」とみなされている。最近の若者は「言われたことしかしない」と批判する声を聞くが、小さい頃から「言ったとおりにせよ」と口やかましく指導(命令)してきた大人がそれを言うのはおかしい。

親の言葉を吟味すると、実際には教育ビジネスの受け売りに過ぎないケースが多い。つきつめるとそこに問題がある。ビジネスは恐怖を煽ることで購買意欲をかきたて、利潤を追求する。だが、大人に人間としての自信があれば、そうしたセールストークから一定の距離を取ることができるだろう。

先日ある保護者(父親)から、「私は『家では1時間以上勉強するな』と言っています」という言葉を聞いて目の覚める思いがした。これは借り物の言葉ではない。「(勉強も大事だが)それ以上に大事なことがある」という親の信念を伝える真摯な言葉だ。と同時に、(親にその意図があるかはわからないが、) こうして時間を制限した方が、子どもは集中して勉強する。

余った時間をどう使うのか。この答えを子どもに考えさせることはできない。教育の主導権はそれぞれの親が握っている。本当に大事な勉強とは何か。その場しのぎでない、将来に役立つ教育とはどのようなものか。父親も母親も、この問題を自分の問題として考えなければならない。

山の学校は設立以来一貫してこの問題を考え続け、具体的な教育を提案してきた。私たちの取り組みはあくまでも一つのヒントである。幸い、趣旨に賛同して下さる多くの保護者、また、一般会員のおかげをもって、この4月で開校十年目を迎えた。真摯に学ぶ会員の姿勢を通じて、私たち自身が励まされ、勇気づけられてきた。

表題の「レス・イズ・モア」は、文脈いかんでは「少数精鋭」と意識してもよいだろう。私たちの活動は数字の大きさと誇示できるものではないが、講師の、そして会員の情熱の大きさは計り知れない。山の学校に限らない。本来の教育はみなそのような形で受け継がれてきた。幼児教育も大学教育も、また、家庭教育も……。時流に流されず、学びのあるべき姿を大切にする者は、親も子ども、教える者も学ぶ者も、いつの時代にあっても「少数」であるが、だれもが「精鋭」たりうる。論より証拠。私たちの情熱のほとぼしりを次頁以下から汲み取っていただければ幸いです。

(文責 山の学校代表 山下太郎)

## ● 発見を共有する

五感を働かせ、色々な「しぜん」仲間たちを迎えた初回のクラスでは、トしました。毎回のように「発見」

と向き合い、発見をすること。その発見を伝え合い、皆で対話をする。新しい仲間しぜんクラスで最も大切なことが何かを、まず確認し合い、認識するところからスタートしてきてくれる生徒もいて、今年度もクラス最初の2~30分は、それらの発表と対話で盛り上がっています。発表会が終わると、発見と対話の舞台は教室の外へと移ります。幾度となく通っている石段や園庭の隅に、山の上から見晴るかす景色に、「ひみつの森」の道々に、数え切れないほどの出会いと発見が待っています。



日記を発表したり、持ちよったものを触ったり嗅いだり



「ブランコを思い切り漕いで、高いところから降りていくとき、どうしてお腹がくすぐたくなるのだろうか？」というM君の発見を、みんなで体験。体の内側にも発見はあります。



「ここはゆらゆらして楽しいんだよ！」たくましい蔓植物。



葉っぱを光に透かすときれいだということをY君が発表してから、見つけた葉っぱを光に透かすことが



ちょっとしたブーム。「この葉っぱ、点々がたくさんあって面白い！」「こうやって重ねるとかわいいでしょ？」葉っぱの中に、尽きない魅力を発見するみんな。



「あ、タケノコだ！」「ふわふわしてる！」「つるつるしてる！」「いい匂い！」「うわっ臭い匂い！」「あ、これ、マイマイかぶりだ！」「見て！こんなに大きな枝が落ちていたよ！」

ジグモの巣をみつけたよ。アリジゴクの巣はここにあるよ。あ、ここに紅カミキリを見つけたよ。こんなとこに一輪だけ花が咲いてるよ。発見の名人Haくん。



## ● 目を閉じて森の中へ

目を閉じる。すると、ふだんは気づかない遠くの音が聴こえる。ふだんは何でもないような肌触りにびっくりする。とたんに目に見えないものへの感覚が研ぎ澄まされます。では、目かくしをしたまま森に入ると、どんなことを感じとれるでしょうか？ 想像しただけで、ワクワクしませんか？ 今回は、手を引く人と、手を引かれる人に分かれて、しっかり安全を確保しながら、2人1組で森の中へと分け入りました。——もちろん、手を引かれる人には「森へ行く」とも告げずに。



「森の中を歩いていることは分かったけれど、今どのあたりにいるのか全然分からなかった。」「いつもより音が大きく感じた！」「ハチの羽音、遠くのイヌの鳴き声や、もっと遠くの子供の声まで聴こえたという人も。Rちゃんによれば「ウグイスが28回ないてた」そうです。クラスが終わった帰り道の石段で「こんなに遠いのに、街の音が聞こえてくるね」といったS君の言葉が印象的でした。



## ● みんなで描く1枚の絵

今年度のA・B両クラスの最初の課題は、大きな長方形の画用紙1枚に、みんなで絵を描くというものです。クラスの一人一人が、どんなものが好きで、何を描きたいかを発言し、それらをどんなふうに「ひとつの絵」としてまとめていけば面白いのか、対話をするところから、制作は始まりました。新しい仲間を迎え、これから1年間過ごして行くにあたって、互いを知り、また、日頃から意見を言い合えるクラスの空気ができれば、という願いがそこにはあります。それが「仲間と絵画をする」意義だと信じるからです。普段一人ではなかなか向き合う機会のない大きな画面を相手にすることも、自分の描いている絵が思いもよらないところへつながっていく驚きがあるのも、この課題の醍醐味です。描いていく過程においても、互いの対話は欠かせません。そこでは、相手の意見や描くものを尊重する姿勢が何より大切です。

今回の絵は、我々講師も一緒になって描いていきます。使用画材は絵の具とクレヨンです。目下制作中である両クラスの作品が、どのような個性たちによって、どのような対話によって膨らんでいったか、そのプロセスをどうぞご覧下さい。

### ・A(火曜) クラス



「人がサルみたいだった昔の世界」や「お化け」を描いてみたいと言うT君。一方、「海を描くのはどう？」というHちゃんの提案に賛同するMちゃん、Sちゃん。宇宙が大好きなH君。



それらをひとつの世界にするにはどうしたらいいかな？画用紙のタテ・ヨコは？海と陸と宇宙の境目は？話し合いが続きます。



お化けのいる街を描くことにしたT君は、描きながら恐竜というモチーフを思い付きました。

よく見ると、魚や惑星の模様にも、クレヨンと絵の具の両方が使われています。これは、先に塗ったクレヨンが後から重ねられた絵の具をはじく効果を利用した描き方です。



「ねえ、ジンベエザメの尻尾って、どんな形してるの？」家から持参した図鑑で調べてみても、横から見た形しか載っていません。Mちゃんは、「こんな形かな、それともこんな形？」と試行錯誤しながら、イメージを膨らませて、描ききってくれました。

### ・B(木曜) クラス

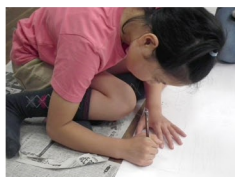
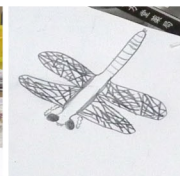


みんな、何を描きたい？『ちょう小動物』を描きたい！（Tちゃんのオリジナルキャラクター）「気球に乗って飛び立つ場面にしない？」「どこから飛び立つの？」「森がいいね。」「空はどのくらいの広さ？」



「画用紙がヨコの方がよくない？空が広がるよ。」  
「それなら、タテに使う方が広い感じがしない？」  
「森と空との境目がどの辺かによって、それぞれ空の広さは変わるよ。」  
「何だかやっぱりタテの方がいい気がしてきた。」

「本当だ！タテにしよう！」  
「私はピアノとか、好きな楽器を描きたいな。」  
「じゃあ、森の動物たちが演奏会をしている場面は？」  
「森の中だから、Y君の大好きな虫たちも沢山住んでいるよね！」  
「カブトやクワガタ描いていい？」



「舞台の端はこの辺かなあ。」  
「え〜と、動物ってあと何がいたっけ・・・(客席の動物たちを描きながら)」  
「ラッパって、どんな形だったかなあ・・・」  
「虫たちも演奏を聴いているはずだよな。」  
「森の向こうの山に、夕焼けが見

えているのはどう？」  
「いいと思う！何だか森の秘密の演奏会みたいだね！」  
「森の緑ってどうすればいいかなあ・・・」  
「夕焼けが当たって光っている部分もあれば、闇に沈む深い緑色もあるはずだよな。」・・・



低学年クラスでは、定番のガラクタ工作をしました。空き箱やプラスチックの部品、のりのふたといったガラクタの山から好きな形を見つけ出し、「これは翼に使えそうだ」とか「これは燃料タンクになるぞ」と、思い思いに接着剤でくっつけていきます。どうすれば、もっとかっこよくできるかを研究し、限られた条件の中で精一杯の工夫をほどこしていきます。その結果、たくさんの思いが詰まった、オリジナル性あふれる作品ができあがりました。

接着剤をつける際、手でおさえて10秒数えるようにと言うと、まるでお風呂出がりの時のように、元気よく数を数えてくれます。たとえわずかの間でも待ち遠しいようです。その間、頭の中では「次はこうしよう」と、

実に色々なアイデアや楽しい想像が巡っていることでしょう。そのように、一つのことに純粋に向かえる時間こそ、クラスで一番大切にしたいものです。

ある時、生徒の一人が自分でも家で新しい作品を作って持ってきてくれました。「これにスプレーして！」と。それは仕上げの着色のことなのですが、「打てば響く」とはまさにこのことです。私もとことん付き合いますので、ぜひ飽きるまで作ってみてください。

高学年クラスでは、木工でテーブルを作りました。「カチン」という、のこぎりを引き終わる音とともに、一つの角材から二つの部品が生まれた時には、何とも言えず深い達成感があります。次に、ねじ留めには、小学生でも手軽に作業できる電動ドライバーを活用しました。「グーン」という、けたたましい音とともに、角材だったものがみるみるうちに形をなしていく様子には、否が応でもワクワクしてきます。

工具の扱いには、はじめのうちこそ苦勞していた生徒たちですが、次第に手の内に入れていくその柔軟性には、さすがは小学生たちだと感心しています。もしかしたら、お家の組み立て家具を、「ぼくに任せて！」と言い出される日が来るかもしれません。その時はどうか任せられる範囲で結構ですので、チャンスをあげてください。その時のことは大人になっても覚えていることと思います。

さて、一度組みあがった机でしたが、まだ脚がぐらついていたので、さらにトラス構造で補強しました。当てる部材には当初、加工のしやすい四角を提案しましたが、あえて難しい三角に挑戦しました。これは「そうした方が丈夫だし見栄えもするから」という生徒自身のこだわりによるものです。その甲斐があって、非常に満足いく仕上がりとなりました。

このような、自分の手で「つくり」出したところの濃い時間が、これから先々の局面において「よし、やってみよう」（あれができたのなら、これも！）という自信の源となってくれるならば幸いです。

（文責 福西亮馬）



## 『ことば』（1～3年生・4年生A・5年生・6年生） 担当 高木彬

ことばは魔法です。唱えれば、ユニコーンでも、天国の宮殿でも、未来でも、まだこの世にないものを生み出せる。唱えれば、心でも、気配でも、過去でも、目に見えないものを表せる。唱えれば、人を元気にできる。昔の日本人が信じていた「言霊」も、あながち迷信だと言えないところがあります。

かくて、ことばには強い力がある。一方で、それを正しく唱えられなければ、本来の力は発揮できません。また、その強力さゆえに、使い方を誤れば人を傷つけること必至の諸刃の剣です。どんな種類があるのか、どんな使い方があるのか、どんな効果があるのか。それを学んでいくことは、すなわち、幾世代にもわたって古くから受け継がれてきた、このきらきらしい魔法を自分のものにするための、愉しき道行きです。

以上が、山の学校のことば1年生から6年生までの各クラスで大切にしていることです。ことばを声に出すとき、それが、創造の、表現の、そして生きるための糧になる。そのためにクラスでは、「朗読」と「創作」を重視しています。そして、その「朗読」の題材として、あるいは「創作」を学ぶ基礎として、俳句や詩や物語を読むこと、つまりインプットを欠かさないようにしています。各クラスの取り組みをざっと示すと、以下のようになります。

#### ことば1～3年生

詩の朗読、書き取り、観察文、俳句、紙しばい

詩の朗読では、主に金子みすゞや谷川俊太郎の短いものを取り上げています。元気いっぱい朗読してくれています。観察文では、外へ出て、発見した春を書いてもらいました。俳句ではカルタ遊びをしています。ゆくゆくは自分たちでも俳句カルタをつくっていきこうと思っています。

#### ことば4年生A

本読み、続編の創作、ことば辞典づくり

短い物語を読んだ後に、その続編を創作しています。全員が同じ物語から出発しているので、その続編を発表しあうことは、他者の感性への気づきを促します。ことば辞典づくりでは、各ことばの意味を自分なりに考えて書いています。全員で1冊の辞典の完成を目指します。

#### ことば5年生

詩の朗読、詩作、リレー小説、世界観づくり

詩の朗読では、谷川俊太郎の「生きる」を取り上げ、その後、自分たちなりの「生きる」を作りました。リレー小説とは、交替で物語を書き継いでいく試みです。自分の物語が他者とつながるよるこび。物語の舞台や人物や文化など、世界観の構想も、並行して進めています。

#### ことば6年生

本読み、創作のレッスン、物語の創作

本読みでは、西洋の童話や日本の昔話など、古典とされる短い物語を、毎回読み切りのかたちで取り上げています。その後、創作のレッスンとして、その物語から取り出されるプロットや着想を毎回カードに蓄積しています。残り半分の時間は、自身の小説の執筆に充てています。

(文責 高木 彬)

『ことば』(2～4年生)

『中学ことば』

『中学・高校英語』

『歴史入門』(高校)

担当 岸本廣大

今年度は、「ことば2～4年生」、「中学ことば」、「中学・高校英語」、「歴史入門(高校)」の4クラスを担当させていただいています。生徒さんの学年や学習内容は多岐に渡りますが、それでもやはり日本語を理解する能力、すなわち「国語力」は共通して求められているということを、改めて感じさせられました。そこで、各クラスの詳細はブログをご覧くださいとして、この山びこ通信では「国語力」の重要性について、クラスの様子を紹介しながら述べてさせていただきます。

日常的に日本語を用いながらも「国語力」が完璧ではないと痛感させられたのは、「中学・高校英語」でのある出来事でした。ある生徒さんが間違った回答をしたのですが、それは英語力の不足というよりも、日本語の問題文の勘違いによるものでした。問題を解く力は十分あるのに、「国語力」がなければ、せっかくの力も発揮できずに終わってしまうのです。英語の文法も、「国語力」があってこそしっかり理解できることを考えれば、英語の基礎もまた「国語力」ではないでしょうか。

また、「ことば1～4年」では、毎回言葉や漢字のクイズを行っていますが、問題を読まないうちに「わからないから、ヒントが欲しい」と言われることが何度かありました。その時は、必要な情報が問題文に書かれていることを指摘して、改めて自分で読んでもらいます。そうすれば、たいていの問題はきちんと解けるのです。小学生ということもあって、文章を読むのにまだ慣れていないのかもしれませんが、だからこそ、まずは自分で問題文を読んで、「国語力」を育てて欲しいのです。

こうした「国語力」は、学校の勉強だけでなく、むしろ日常生活でこそ必要とされます。「中学ことば」では、新聞の記事を読み、書き写すことに取り組んでいますが、時間に余裕があれば、その記事の内容について生徒さんと議論をします。議論ができるということ自体、生徒さんの「国語力」の高さを示しています。というのも、専門的な知識は解説によって補えますが、「国語力」がなければ、記事の内容が理解できず、議論もままならないからです。中学生ならまだよいのですが、高校生になり、大学生になり、社会人になったとき、新聞の内容を理解できなくてもよいのでしょうか。今のうちに日本語に慣れ、「国語力」を鍛えておくことは、将来に必要とされることなのです。

さらに、「歴史入門(高校)」の議論では、言葉の裏を読むことも必要とされます。例えば、第一次世界大戦時にアメリカ大統領ウィルソンが提示した「十四カ条」は、表面上正しく思えます。しかし、ソ連の成立という背景を考えれば、共産主義勢力への対抗という一面も見えてきます。情報があふれる現代社会で、言葉が本当に意味するところを考える「国語力」は重要な能力となるでしょう。このクラスでは、歴史を学ぶだけでなく、さらに進んだ「国語力」を磨いているともいえるのです。

人が言葉を用いる限り、「国語力」は必要不可欠であり、あらゆる活動の基礎となります。この一年を通して、生徒さんの「国語力」を少しでも伸ばすことが出来るよう努めていきたいと考えています。

(文責 岸本廣大)

## 『ことば』(4年生B) 担当 福西亮馬

このクラスの生徒たちは、今お話作りに一番興味があります。昨年度のクラスからの流れもあり、「書くこと」には自信を持ってきているようです。その芽を大事に見守りたいと思います。また漢字も好きなようなので、今学期は、その二つを柱に取り組んでいます。

まず漢字について述べますと、4年生になり、習った字がだいぶ増えてきました。また音読と訓読の違いもしばしば目にするようになってきました。そこで、今まで習った漢字をもとにして、その組み合わせを意識してもらえるように、「熟語カード作り」ということをしました。お互いに自分の好きな漢字を書いて交換し、相手はそれにつながる新しい漢字を考える、という趣向です。熟語が一つできあがるたびに、カードは二倍、四倍に増えていきます。そうこうするうちに、自然となされる「今日学校で習ったよ!」という報告には、私も昔を思い出して、一瞬タイムスリップしたような気持ちになりました。飛び出してくる一字一字には、一体どんな背景的なエピソードがあるのでしょうか。それを想像しながら耳を傾けるのは実に楽しいものです。『菜』は、ヤサイもあるけど、サイエン(菜園)にしよう」と聞こえたかと思えば、『江』って、エド(江戸)のほかにも何かある?と相談しています。そして「国語辞典があったらなあ…」という声も聞こえてきます。するとにわかに「ちょっと待って。私、持ってくる!」といった調子です。こうしていっぱいになったカードを持ち寄って、最後には熟語の「神経衰弱」をしました。それがまた大いに盛り上がりました。

お話作りも意気揚々としています。生徒たちの作品を見せてもらうのはとても嬉しく、あとでコメントをつけて、活字に起こしたものと一緒に返却しています。作品は、途中であれ完成したものであれ、人に見せることは恥ずかしいものですが、けれどもこのクラスでは、それ以上の自信が芽生えてきたように感じます。書くことは自信につながります。ある時、「みんなは、いろんな物語の始まり方を知っているね」と感心すると、「かぎかっこで始まるのもあったよ!」という話題になりました。すると、国語の教科書に載っていたそのお話を、いっせいでと、元気よくみんなで暗唱してくれました。それは、そのように自分を表現することにリラックスしてくれている証拠なのだと感じました。

最後は、いつも一冊の物語を音読しています。音読は、かぎかっここのところで気持ちを込める余裕が出てきており、去年よりもまた一段と上手になってきたと感じます。今読んでいるのは、アリソン・アトリーの『こぎつねルーファスの冒険』です。森でアナグマの奥さんに拾われた子ぎつねは、ルーファスと名づけられ、一家のもとで育てられます。生徒たちは、ルーファスの愛嬌にひきつけられながら、自分ももしアナグマの奥さんだったら、ルーファスだったら…という慈しみや想像を働かせて、読み進めているようでした。物語の舞台は、決して善い人ばかりの世界ではありません。ルーファスを森に捨てたおじさんも出てきます。かといって勧善懲悪が物語の主題に据えられているわけでもなく、「こういう人って、いつでも、どこにでもいるんだよね」という現実味を、アイロニーのかわりに淡々としたユーモアが包んでいます。実際、この作者には、物事を常に両方から観察する目と、嫌なことがあっても自分らしさを見失わない芯の強さがあります。そうした作風が、これからの生徒たちのお話作りにも参考になればと思います。

(文責 福西亮馬)

## 『かず』(1~2年生A・4年生B・5年生B) 担当 福西亮馬

今年度は1、2、4、5年生を受け持っています。ドリルやプリントで学課のおさらいをした後は、それぞれの学年に応じたパズルをしています。私も生徒たちと一緒に、色々な切り口で「考える要素」を楽しんでいます。

さて、論理的な解き方を面白いと感じることには、どうやら過渡期というものがあるようです。これまで私が見てきた生徒たちの様子では、「偶然でもいいから答を見つけ出す」という楽しみ方から、「答の理由や必然性まで知りたい」と思うようになるのは、どんなに早くても4年生から5年生ぐらいの頃のように思います。したがって、それまでは徐々にステップを踏んでいく必要があると考えています。

そこで、1年生の時は、迷路や図形、間違い探しといった、感覚の手を借りながら頭を働かされるものを入り口に据えています。そのうちに、徐々にいろいろなパズルで、ルールをきちんとおさえたり、隠されたヒントを見つけ出すといったことに慣れ、偶然による解き方に満足するだけでなく、一方では論理的に解く力も促していこうと考えています。最終的には、「論理パズル」と称する、中学の幾何の証明にもつながる問題へと導いていく予定です。

さてこれは、マッチ棒パズルをしていた日のことです。うんうんとうなっていた1人の4年生の生徒が、ついに自力で解けた瞬間、文字通り「跳び上がって」喜んだのでした。そして「(自分の名前)って、超天才！」と喝采をあげたことがありました。もしもこれが、解けていない人に対する優越感であったのなら、悪いたとえ話になるところですが、この出来事はそれとは正反対のことでした。ぱっと輝いた生徒のその表情からは、「『考えること』って、(超)楽しい！」という気持ちが汲み取れたのでした。

たった一本のマッチ棒を動かすということに、正解の筋道が見えた瞬間は、あたかも視界が開けたかのような、何にもかえがたく深い感動があります。けれども普段、私たちはつついそのような純粹思考からは遠ざかり、「考える」というその行為を、考え続けるためではなくて、むしろ早くそのことから解放されたいがためにしているという時があります。テストの前だけ詰め込んであとは忘れてしまうというのも、その一つかもしれません。(そしてそうした不自由な思考にとらわれた時、気になるのが、テスト範囲だったり平均点だったりします)。

しかし先の「超天才！」は、そんな雑念とは一切無関係です。それは「自分で自分に限界を設けたりなんかしないぞ！」という、自信に満ちた表明です。それは偉そうなことでも何でもなくて、「その時、掴んだ」という、「一瞬」の事実を確認したまでです。それはまたすぐにあやふやな感触となって、手放さなくてはならないでしょう。ですが、だからこそいっそう、次の瞬間に湧き上がった「よし、次も！」という気持ちは、子どもだからでも、大人だからでもなく、無条件に大切にしたいものです。

授業では、「自分はどうせこうだから…」と限界を設けたり、よそ見をしながら他人とくらべ合う、そんなことのために、せっかくの頭脳をすり減らすのではなくて、精神を高揚させることを、すなわち、こつこつと考え続けることによって、それまでの偏見から離れ、自分がますます軽くなっていく、そんなすがすがしい経験を心ゆくまで味わってほしいと考えています。(文責 福西亮馬)

## 『かず』(4年生A)

担当 高木 彬

このクラスでは、昨年度に引き続き、ドリル(30分)、かずの探求(15分)、パズル(15分)のメニューで、毎時間進んでいます。

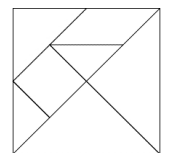
「かずの探求」とは、ある数字について、それにまつわる事柄を見つけてくるというものです。たとえば、「4」なら「方位」や「手足」、「29」なら「Iちゃんと、Iちゃんのお兄ちゃんの名前の漢字を足した画数(!)」など。おそろしくシンプルですが、毎回新鮮な発見の驚きがあります。この耳慣れない取り組みについては、前号(2011年度冬号)の「山びこ通信」で詳しく紹介しましたので、ご覧いただければ幸いです(バックナンバーは山の学校HPでも公開しています)。4人で交替しながら毎回1つずつ数字を進めてきて、この記事を書いている現在、「32」まで辿り着きました(つまり32週目)。昨年度の終わり、Miちゃんが言ってくれた言葉が、今も印象に残っています。「100までやる!!!」

さて、この取り組みも2年目に入り、ある変化が起きました。これまでは、子供たちが発見したことを、私が聞き、ホワイトボードに板書をしていました。しかし最近では、子供たちが自ら板書するようになりました。これは、ささやかに見えて、決定的な変化でした。アイデアが次々に生まれるようになったのです。その数字の担当者が板書しているさなかに、思いついた他の子がそこに書き足していく。みんながホワイトボードの前で書く発見は、まるで夏空の入道雲のように、どんどんと増殖していきます。その活気が、ホワイトボードの前から私を追い払った。これは最高に嬉しい立場の逆転です。

話は変わって。パズルでも変化がありました。これまでの迷路、まちがい探し、Miちゃんに紹介してもらったパズル、トランプに加え、新しい要素が加わりました。それは、「タングラム」。ご存じの方も多いでしょうが、正方形を7つに分割したピースを組みあわせていろいろな形をつくる、シルエットパズルです。正方形のプレートからピースを切り出すところから取り組んでもらいました。図形の基礎をひとつおり学習し、長さを測ることがで

き、小数の概念を知った4年生だからできることです。前々から、このクラスでできれば楽しいだろうと思って、あたためていました。

現在は、ここに例に挙げたような「ヨット」や「キツネ」など、既存のシルエットの問題にチャレンジしています。ゆくゆくは、自分で新しいシルエットをつくったり、友だちどうしで問題を出しあったりできればと思っています。



切り方



キツネ

ヨット

(文責 高木 彬)

『かず』（1～2年生B・5年生A）  
『中学数学』 『高校数学』

担当 浅野直樹

ある程度慣れて親しくなると、生徒から私の生活について質問されることがあります。普通に答えてもいいのですが、どうせなら数学的に考えてみましょう。

収入がどれくらいあるのかという単刀直入な質問があります。アルバイト募集の貼り紙などを注意して見ると、相場は時給 800 円やそこらだということがわかります。私がしている仕事は事前準備が必要なこともあり、その相場よりは高いことが推測できます。次に生徒が支払っている授業料を考えると、補助金をもらっているといったことがなければ、それを超えることはありません。これで一定の範囲に絞られました。

このように考えると、授業料が高い塾の講師の収入のほうが多くなるように思われます。大まかな傾向としてはそうでしょうが、必ずしもそうではありません。もう少し厳密に考えると、講師の収入は、授業料から必要経費を引いた額を超えることはありません。電気や紙といったわかりやすい経費にそれほど差はないでしょうが、家賃や講師以外のスタッフの person 費、事業拡大資金には大きな差がありそうです。想像力をはたらかせて自分が経営すると思えばこのあたりの事情は飲み込めるはずで、いろいろな立場に立って考えるというのも数学的思考の一つの大きな特徴です。単にパズルを解くだけでなく、自分でも作ってみるとより深く理解できるのと同じです。

このように数学的に考えると本質を大きくはずすことはありません。もう一つ年金を例にとって考えてみましょう。

現在日本には大きく分けて厚生年金、共済年金、国民年金の三種類の公的年金があります。前二者には事業主負担分があるので従業員にとってお得だと言えます。国民年金には事業主負担がない代わりに税金による国庫負担がかなりあるので、これも原則的にお得な年金です。つまり平均寿命まで生きたとしたら、物価上昇を考慮に入れても、支払った額よりも受け取った額のほうが大きくなるということです。ただし国民年金は積立方式ではなく賦課方式なので、世代によってどれくらいの得になるかは大きく異なり、場合によっては損をする世代も出てくるかもしれません。しかし障害年金を受給する可能性や、国庫負担率が将来的に引き上げられるだろうと予測すると、それでも加入するほうが得になるのではないかと私は考えています。少なくとも年金を未納にするよりも、免除や猶予の手続きをするほうがよいとは確実に言えます。年金に関しては細かい話がたくさんありますが、数学的に大枠を押さえておけば安心できます。

(文責 浅野直樹)

『中学英語』（1～2年生） 『高校英語』  
『英語一般』

担当 浅野直樹

単純な事実として、語彙が多ければ多いほど英語がわかるようになります。とりわけ一通りの文法事項を習得してからはそうです。あるいは逆に文法を習う前の小学生についてもそれは言えます。

語彙を増やすためには市販の単語集を使うのもよいでしょうし、英文を読んでいながら出てきた未知の語を集めて独自の単語集を作るのもよいでしょう。しかしこのように意識して覚えようとした語はまた忘れやすくもあります。ここでおすすめしたいのは、すでに知っている語について英語の意味を調べることです。そうするとすごく記憶に残ります。そしてその事柄についての理解も深まるので一石二鳥です。

このやり方での材料は歌から最も豊富に仕入れることができます。歌詞や歌のタイトルに英語が採用されていることは非常に多いです。カタカナ語として日本語の中に定着しているものを含めると英語が入っていない歌を探すほうが難しくなります。ぜひお気に入りの歌の中の英語を辞書で調べてみてください。きっと新発見があります。意味を調べたせいで幻滅することもあるかもしれませんが、その点はご了承ください。

アーティストのグループ名も英語の宝庫です。EXILE は「国外追放」という意味です。そんな彼らが国歌を歌うとは皮肉なものですね。Mr. Children には大いに感謝したいです。彼らのおかげで child の複数形が children だということが定着しました。その昔にはチャイルズというアイドルグループがいましたが…。Dreams Come True は SVC 構文のいい例文になっています。SMAP は Sports Music Assemble People (スポーツと音楽を結集する人々) の頭文字を取ったものだというのが有力な説です。

頭文字を取った略称の本来の意味を考えるのもいいですね。このところ話題の TPP は Trans-Pacific Partnership (太平洋を越えた相互関係) です。APEC は Asia-Pacific Economic Cooperation (アジア太平洋経済協力) ですから同じ Pacific の P ですが、OPEC は Organization of the Petroleum Exporting Countries (石油輸出国の組織) ですので、Petroleum (石油) の P です。

英語に敏感になると思わぬ発見があることもあります。最近では原子力関連の話題に事欠きませんが、英語では原子力も核も同じ nuclear で区別しません。逆に日本語で責任に相当する語は responsibility、accountability、liability の 3 つありますが、語の成り立ちから考えると responsibility は応答責任、accountability は説明責任、liability は法的責任だと理解できます。

(文責 浅野直樹)

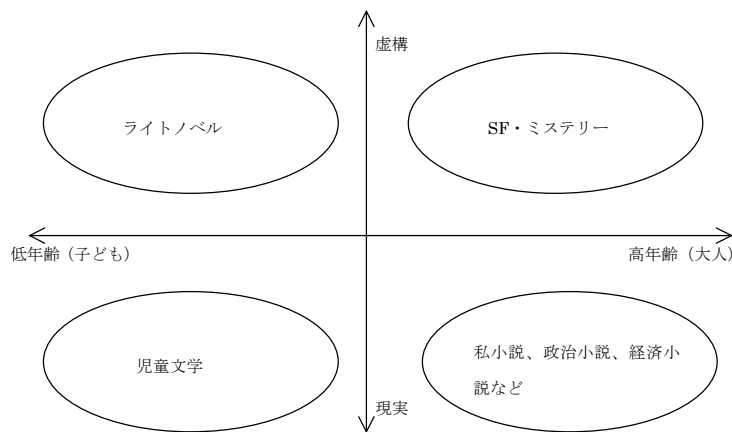


しばらくお休みしていた調査研究入門のクラスが復活しました。このクラスでは本当に自分の興味がある事柄について調べるので、人生を振り返ったときにいい思い出になるのではないかと思います。資料を探し、論理的に考える、人に伝えるためにわかりやすく表現する、といった技術は興味を追求する中で自然に身に着くことでしょう。

リアルタイムでの進行状況はブログを参照していただくとして、ここでは大まかな流れと暫定的な結論だけを紹介합니다。

調べたい事柄を決めたらまず辞書に当たるのが王道です。国語辞典と百科事典の両方、それも可能ならいくつかの種類の辞書を読むことをおすすめします。今回は「小説」をテーマに決めたのですが、「小説」という言葉は坪内逍遙が明治時代にノベルの翻訳語として用いたのが始まりだったこと、もともと中国語で「小説」は取るに足らないような市中の出来事や話題を記録したものを指していたこと、ヨーロッパではロマンスからノベルへという動きがあったことなどがこの時点でわかりました。

次は基本文献に当たります。今回の「小説」というテーマであれば、坪内逍遙『小説神髓』（岩波書店、2010）や野口武彦『小説（一語の辞典）』（三省堂、1995）を参照すべきです。そうしているうちに特に現



代的なライトノベルに興味に向いたので、一柳廣孝、久米依子『ライトノベル研究序説』（青弓社、2009）や榎本秋『ライトノベル文学論』（エヌティティ出版、2008）、新城カズマ『ライトノベル「超」入門』（ソフトバンククリエイティブ、2006）などを読みました。

そこで読んだことに触発されて、左のような図式を思いつきました。具体的な作品や作家もこの図の中に書き込むことができます。今後の展開が楽しみです。

（文責 浅野直樹）

『ロボット工作』と『ユークリッド幾何』。なぜそれらがセットになっているのか、不思議に思われるかもしれません。しかし、どちらにも共通要素があります。それは、「簡単なものが複雑なものを構成していること」と、その骨組みが「論理」であるということです。ここでいう「簡単なもの」とは、根っこにあるルール、「原理」のことです。ロボットなら「2進数」が、幾何なら（平行線公理など5つの）「公理」がそれにあたります。また「複雑なもの」とは、ロボットの「動作」ないし幾何の「命題」のことです。

00、01、10、11。これは2ビットの2進数です。ロボット工作では、モーターが1つの場合、00を「停止」、01を「正転」、10を「逆転」といった状態に対応付けます。（ただしここで11は未定義）。さらに桁を倍を増やして、0000、0001、0010、0011、0100、0101、0110、0111とすれば、8つの出来事が定義できます。これでモーターを2個動かすことはもちろん、0~9やA~Fといった文字を7セグメントLEDという素子に表示させることもできます。この2進数の値には、どんな出来事も対応付けることができます。

（どうやってそれが可能なのかは、ぜひクラスの中で体験して下さい）。

ロボット工作で「何かを実現したい」と思った時、根っこでは、この0と1で考えます。その原理はシンプルだからこそ様々な応用が利くとも言えます。また数字で表された出来事は「計算」することもできます。そして計算結果を新しい出来事と結びつけた時、それが「驚き」となります。（動いたロボットを見て「おお」という声が出るわけです）。けれどもその根底で働いているのは、至って単純な計算（の繰り返し）であり、それがプログラムです。その構造は、幾何の証明に使われる論理と全く同じものです。

一方、幾何の世界では、単純な事実の積み重ねから導かれた定理が、にわかには信じられないような結果を述べています。それは見た目を多くはぎ取っている分、より純粋であるとも言えます。そして、そこにある驚きは、ロボットの動作と比して何ら遜色はないでしょう。

このように見た目の違うクラスですが、どちらも合言葉となるのは、「論理」と「分かった！」です。そして小手先の応用にとらわれるよりも、むしろ原理に対する理解を深めることに、時間をかけようと考えています。

（文責 福西亮馬）

# 『中学理科』

担当 高木 彬

「おおーっ！！」という歓声。「氷の花」が咲いたのです。顕微鏡で見た雪の結晶のこと？ いいえ違います。氷の中で一緒に凍らせた花（氷中花）のこと？ いいえ違います。花のように開く氷のことです。どういことでしょうか？

あまり知られていないことですが、水が凍るには、温度が氷点下（0℃以下）になることに加え、もうひとつ条件があります。それは、物理的な刺激です。その刺激によって、水を構成する分子（H<sub>2</sub>O）の配列が変わり、氷という結晶になるのです。お米を買って帰ってきて、袋から米びつにお米を流し込んで、それが満杯になったとします。でも、米びつをトントンと数回叩けば、その上からまたお米を入れられるようになる。中の米粒どうしがぎゅっと詰まったからです。水が氷になるのも、同じようなものです。氷点下の水に衝撃を与えてやると、水分子が詰まり、配置が整うのです。この、整って密になったものを、私たちは「氷」と呼んでいます。

別の言い方をすれば、水は、物理的な刺激を与えなければ、氷点下になっても凍らない場合がある、ということです。この状態を「過冷却」といいます。つくり出すのはなかなか難しいのですが、衝撃を与えないように静かに素早く冷やしてやることができれば、「-10℃」の「水」をつくることができます。

たとえば、広い容器で、砕いた氷と塩を混ぜて-20℃の寒剤をつくっておき（氷と塩を混ぜるとなぜ-20℃になるのかも興味深いところですが）、そこに、常温の水をうすく張った小さなアルミカップを入れます。しばらく静かに待っていると、カップの中の水は急速に氷点下を過ぎ、過冷却状態になります。このとき、カップの過冷却水の真ん中に小さな氷のかけらを落として衝撃を与えてやると、その落下点を中心に、同心円状に、水が氷へと結晶化していきます。その様子は、まるで花が開くよう。えもいわれぬ美しさです。冒頭の「おおーっ！！」という歓声は、それが言葉にならない体験であることの、何よりの証です。この実験が成功したときには、一同、手をたたいて喜びました。（この実験はご家庭でも簡単にできますが、ここで簡略化して書いた手順以外に、成功させるためのさまざまなコツがあります。上記を参考にされる場合にご注意ください。ご連絡を頂ければコツをお教えします。）

理科の実験には、過去の天才たちの発見の驚きを追体験できるという、途方もない価値があります。「水は 0℃以下になれば凍る。こうした液体から固体への状態変化を、凝固といいます。」言葉で伝えればただこれだけのことも、実験によってその凍る瞬間を目の当たりにすれば、こんなに驚きと美しさに満ちている。理科室のない山の学校でできることは限られていますが、少しでもこういう体験ができればと思っています。

中学理科のクラスでは、このような実験と、座学（質問コーナーと問題演習）に、隔週交替で取り組んでいます。

（文責 高木 彬）

## イベント・夏期講習（中高生対象）

7/23 (月)	時間：18:30～21:30 場所：山の学校の教室	日時 右記	8/7(火)～8/10(金) 17:10～18:30 8/21(火)～8/24(金) 18:40～20:00 場所：山の学校の教室 20:10～21:30
『なんでも 勉強相談会』	対象：中学生・高校生 講師：浅野直樹・山下あや 費用：無料  勉強のことで進路のことで、日頃抱えている疑問は何でも受け付けます。自習のために教室を利用することも歓迎します。	※『中学生・ 夏期講習』	科目：「英語」8コマ・「数学」8コマ 「国語」4コマ・「理科」4コマ 時間：1コマ80分 講師：浅野直樹・岸本廣大・高木彬 費用：英語 24,000円・数学 24,000円 国語 12,000円・理科 12,000円
7/9 8/20 (月)	時間：18:40～20:00 場所：山の学校の教室	日時 右記	8/7(火)～8/10(金) 17:10～18:30 8/21(火)～8/24(金) 18:40～20:00 場所：山の学校の教室 20:10～21:30
『英語特講』	対象：中学生・高校生 講師：山下太郎・山下あや 費用：無料  それぞれの生徒に応じた問題を用意し、時間内でひたすら問題を解き続けてもらいます。その場で採点しながらコメントしてきます。	※『高校生・ 夏期講習』	科目：「英語」8コマ・「数学」8コマ 「国語」4コマ・「歴史」4コマ 時間：1コマ80分 講師：浅野直樹・岸本廣大・高木彬 費用：英語 24,000円・数学 24,000円 国語 12,000円・歴史 12,000円

※ 夏期講習の詳細につきましては、ホームページで告知しております。また FAX か Email でお問い合わせ下さい。（FAX：781-6073 / Email：taro@kitashirakawa.jp）



4月の将棋道場は新学期ということもあり、定員いっぱいの20名の子どもたちが参加してくれました。初参加の子も数名ほどいましたが、みんなすぐに将棋道場の雰囲気に馴染んでくれたようで、楽しく将棋を指してくれていたようです。

駒の動かし方を覚えてばかりのI.Koくんは対戦をするのがほとんど初めてで、なかなか勝てなかったようですが、不機嫌になったりすることもなく、素直に将棋を楽しんでくれたようです。初心者はどうしてもなかなか勝てないので、はじめは楽しくないと思うのですが、そこで「悔しい、勝ちたい」と思うことができれば、その子は必ず上達します。I.Koくんにも是非

そうしてもらいたいものです。いっぽう、Taくんの友達のYuくんは初参加ながら三連勝していきなり7級に昇級していました。荒削りながら、センスの良い指し回しで今後の活躍が期待できそうです。

全体でみて好調だったのは、SyoくんとJuくんです。それぞれ6級と5級ですが、ふたりとも上級者相手に勝ち星を稼いでいました。どちらもまだまだこれから強くなりそうですし、互いにいいライバルになりそうな予感がします。勝ちまくっている子たちにはある種の「勢い」があり、少々の実力差があっても上位者に勝ってしまう場面をよく見かけます。このふたりにはその「勢い」を感じるので（ちなみにSyoくんは2月のトーナメント大会で準優勝でした）、このまま行けるころまで行ってほしいなと思います。現在5級のSoくんやK.Koくんは最近やや足踏み状態ですが、これからSyoくんやJuくんがいいライバルになるのではないのでしょうか。M川さんのお母様もこのあたりの子どもたちと平手で指していい勝負をされているようです。

またFuちゃんも7級から6級に昇級しました。AiちゃんやYuちゃん、Koちゃんなどがライバルですが、最近めきめき強くなっていて、女の子陣のなかで一步抜け出したかもしれません。Aiちゃんがその後を追いかけるような展開だと思います。ふたりとも対局中の集中力が高く、きちんと3手先を読んでから指そうとする努力が見てとれます。定跡や囲い方を覚えて、詰将棋を解くなどの練習を積みばもっと強くなるのではないのでしょうか。Fuちゃんの弟のTeくんもお姉さんを追いかけて強くなっていて、見ていて微笑ましいです。お姉ちゃんをおびやかす実力を身につけてほしいものですね。

僕自身もKaくん、Yuちゃん兄妹と六枚落ちで対戦しましたが、どちらも僕の勝ちでした。端を破るところまではふたりとも出来ているのですが（六枚落ちや四枚落ちなどでは端攻めをするのが定跡です）、その後の詰めがまだまだ甘いようです。飛車を成り込んだ時点で安心してしまい、終盤の「寄せ」ができていません。六枚落ちの定跡だけでなく寄せのテクニックもしっかり勉強して、Kaくんにはそろそろ僕を負かしてほしいところです。

道場の初めと終わりでは詰将棋のルール解説をして、みんなに3手詰の問題を解いてもらいました。すぐに解ける子もいれば、まだ詰将棋のルールがよく分かっていない子もいるようでした。たくさん対戦することに加えて、たくさん詰将棋を解くことも将棋が強くなるための重要なステップです。まずは1手詰や3手詰からでよいので、詰将棋を考える習慣をつけてほしいなと思います。詰将棋は頭の体操にもなり、良い思考の訓練にもなることでしょう。将棋道場のみんなの棋力がさらにアップして、充実した対戦が繰り返されることを期待しています。



(文責 百木 漠)

## 『山の学校ゼミ（社会）』

担当 中島啓勝

このクラスは3月まで開講されていた「経済学入門」を引き継ぎつつ、新たな看板を掲げてスタートしました。前任の百木先生の授業では、毎回経済に関するニュースの解説を行った上で議論を行い、同時に経済現象の背後にある理論的・思想的背景を知るための本を講読してきました。ただ、議論が盛り上がるにつれ、その内容は経済の枠に留まらず広く社会一般に関する話題へと広がっていったとのことで、4月からはそうしたニーズに対応できるゼミを行うことになった次第です。合言葉はズバリ、「大人の社会科」。

受講者さんたちとの相談の結果、今期は「国際政治」について勉強してみたいということになったのですが、政治という極めてデリケートな問題をできる限り公平無私な立場で取り扱い議論するのは本当に難しい。そこでこのゼミでは、多種多様なテーマ設定を行うことで、固定観念に捉われないよう理解を深めていくことを目指しています。専門知識を得ることももちろん大切ですが、それよりも国際政治の動向やその歴史的経緯についてどのように考えたらいいいのかの「コツ」を探っていくことに主眼を置いています。

具体的な内容についてご紹介します。最初の数回は、今年が四つの大国の政治指導者交代劇が一斉に起こる激動の年であることに注目し、各国が内外に抱える政治的課題とそこに通底するグローバルな経済危機について話し合いました。特にその頃ちょうど行われていたフランス大統領選や中国国内の政治スキャンダルについてはニュース記事などを読みながら詳しく解説しました。

大国の現状を確認したところで、次は「小国」を取り上げることに。打って変わって今度は、「シンガポール建国の父」リー・クワンユーのインタビューを読み、東南アジアの小さな巨人、シンガポールの視点から世界そして日本はどのように映っているのかを勉強しました。これを日本にとって「アジア」とは何かを問い直す一つの鏡にしなごら、TPPや沖縄基地問題などにも議論は及びました。

最近のゼミでは、ユーロ危機に揺れるEU圏の情勢についてより多角的に見るため、「中欧」という歴史的な概念について二部に分けて学びました。まずはドイツが覇権的に振舞おうとする時に何度も甦る「中欧」帝国の野望について。そしてもう一つは、そのドイツやソビエト・ロシアという大国に挟まれて、歴史の波に翻弄され続けてきたポーランドやチェコなどの小国群が夢想してきた、「中欧」連邦という秩序構想について。この二つの「中欧」概念を比較しながら、ヨーロッパの歴史的多層性について話し合いました。「歴史の見立て」は必ずしも一つではないことを、皆さんとは確認できたように思います。

今後もこのクラスでは受講者の皆さんの要望に合わせて、様々な題材を選んで楽しく議論していこうと思います。興味のある方はお気軽にご参加下さい。

(文責 中島啓勝)

## 『漢文入門』

担当 木村亮太

1ヶ月ほどの春休みをはさんで、春学期の授業が始まりました。今学期もメンバーは変わらず、Iさん、Kさん、私の3名です。

今学期は、北宋・司馬光の『資治通鑑』(中華書局、1956年)をテキストに、巻頭の威烈王二十三年(B.C.403)「初命晋大夫魏斯、趙籍、韓虔為諸侯(初めて晋の大夫魏斯、趙籍、韓虔に命じて諸侯と為す)」の一条から読み始めました。これは、周の天子がその諸侯である晋国の3人の大夫に、その主君である晋侯とおなじ侯爵を認めたとある記事です。もともと、「天子——諸侯(晋侯)——諸侯の大夫(魏斯、趙籍、韓虔)」という君臣関係が成り立っていましたが、これが「天子——諸侯(晋侯、魏斯、趙籍、韓虔)」に変化した、つまり、晋侯と3人の大夫の地位が対等になったことを、この記事は意味します。

ところで、周王朝の32代目の天子である威烈王の、在位23年から一書の記載が始まる、というのは、いささか中途半端との印象を受けるのではないのでしょうか。

実は、魏斯ら3人の大夫は、突如として諸侯に格上げされたわけではありませんでした。晋は春秋時代の大国でしたが、その実権は徐々に主君の晋侯の手から、その6人の大臣(六卿)へと移っていきました。六卿は互いに淘汰し、勝ち残ったのが韓、魏、趙の三氏(三晋)でした。三氏は、下克上の末に現在の地位を得たのです。

無論、本来なら下克上は許されたことではありません。ところが、周の天子は、魏斯らを諸侯として正式に認めてしまったのです。これは泥棒にお墨付きを与えるようなもので、世間に示しがつかないのは当然のことです。こうして、謀略と武力がものを言う戦国時代の端緒が開かれ、周王朝は滅亡へと向かうことになります。

君臣関係の崩壊を招き、自らの地位を不安定なものにした周の天子の行為は、非常に愚かです。この記事

を巻頭に置くことで、司馬光は、三晋の下克上を戒めるよりも、むしろその横暴を正当化するようなことをした周の天子をこそ責めています。

司馬光にとって、というよりも、儒教道德のなかに生きた古代の人々にとって、君臣関係は父と子の関係と同様、決して動かさないものでした。そのことをなによりも優先させるため、この記事は『資治通鑑』の巻頭に置かれることになったのです。このことは、この記事の下の「臣光曰」として書かれた司馬光自身の解説で明らかにされています。

授業のあと、Kさんは司馬光の考えがあまりに旧時代然としていることに戸惑っていましたが、現代との比較から見えてくるものも少なくはないでしょう。また、Iさんからは、三晋が諸侯に立てられて、晋侯はどうなったのかという質問が出されました。私たちは事件の主役にばかり目を奪われがちですが、いつもながら、その冷静さには驚かされました（晋は安王二十六年（B.C.371）に三晋によってその領土を分割されました）。

（文責 木村亮太）

## 『英語一般』

担当 浅野直樹

（→8 ページ目をご覧ください）

## 『イタリア語講読』

担当 柱本元彦

今学期のテキストはちょっと目先を変えて映画のシナリオを使用しています。作家・詩人・社会に発言する知識人として、戦後イタリアで誰よりも大きな影響力（あるいはスキャンダル力）をもったパズリーニは、映画監督としてもフェッリーニに匹敵する仕事を残しました。そのパズリーニの短篇映画、*Che cosa sono le nuvole?*（雲って何だろう）は、日本では未公開だったようでビデオも出回らず（その他のパズリーニ映画はほとんど日本で入手可能です）、残念ながら知られざる傑作になってしまいました（イタリアでは有名な作品ですが）。主演のトトはイタリア最高の喜劇俳優で、知らないイタリア人はおそらくいませんが、ほとんど盲目となった最晩年のこの演技もほんとうに素晴らしい。トトの他には、二ネット、チッチョとフランコ、アドリアーナ・アスティ、ラウラ・ベッティ、そしてモデューニョが歌いながら出演するという、実に豪華なものです。ストーリーはシェークスピアのオセロを下敷にしていますから、物語を追うことに関してはかんたんです。しかしオセロを下敷にしてこんな映画を撮ることができたとは！と驚きながら見とれてしまいますね。20分ほどですから時間的にもちょうどよく、以前からぜひ授業であつきたいと考えていました。実際のところ、ビデオが利用できるテキストは便利なものですが、これは望みうる最高のもののひとつだと思います。シナリオにも映画にも、ローマ方言とナポリ方言が少し入ってきますが、二つとも方言中の方言ですから、このようなかたちに慣れるのも有益な勉強ではないでしょうか（はじめは多少とまどいますが）。そして、授業ではとくに触れませんが、シナリオと実際の映画の台詞との差を見るのもおもしろく、映画を見ただけではよく分からなかったショットも理解させてくれます。というわけで、現在、三名で読み進めています。受講生のツッコミには講師もたじたじ、、と申しますか、講師としてもとても楽しく勉強させていただいています。

（文責 柱本元彦）

## 『フランス語講読』

担当 武田宙也<sup>ひろなり</sup>

フランス語講読では、今学期も引き続きダニエル・アラスの『絵画のはなし』を読んでいます。去年の秋から読み始めた本書ですが、数ヶ月にわたってゆっくりと読み進めるうちに、はじめはぼんやりとその輪郭がつかめるのみであったアラスの思想も、だんだんと身近に感じられるようになった気がします。

アラスは本書のなかで、ひとつの考えを、さまざまな具体例を挙げながら繰り返し説明しています。それが、美術史におけるアナクロニズムの重要性です。アナクロニズムとは、さまざまな時間が混ざりあう事態であり、また、そうした時間のあり方として歴史を捉えることです。たとえば、わたしたちが、自らの生きる現代という時代に思いを馳せるとき、それは往々にして、わたしたちの来し方行く末についての思いへとつながっていくでしょう。このようにわたしたちは、「いま」という時を、歴史の流れから切り離され、それ自

体独立したものというよりもむしろ、つねに過去や未来とのつながりのなかで捉えているように思われます。実際、こうした歴史観は、さまざまな宗教的行為を含む、日常的な儀礼のなかにも認められるものでしょう。アラスの場合、とりわけ過去と現在という時間の混交としてのアナクロニズムを、美術の歴史へと投影していくこととなります。

芸術作品は、「現在それが存在しているところの時代」と「それがつくられた時代」という二つの時代のあいだに流れた時間を、痕跡として留めるものです。それは、時間とともに作品に刻まれた汚れや傷みであり、あるいはまた、歴史の中で作品に注がれてきた数多くの眼差しです。二つの時代のあいだに流れた時間を、アナクロニズムの立場から重要視するアラスは、これらの痕跡こそは、芸術作品がこれまで生きてきた証であると考えます。このように、芸術作品の生を人間の生と同じように考える立場からするならば、たとえば作品の経年変化を人為的な介入によって修復し、その「オリジナル」の姿を復元しようとする欲望には、一定の留保がつけられるかもしれません。それは、作品を「それがつくられた時代」へと無理矢理もどすことによって、それが生きてきた歴史を、ひいては作品の生そのものを否定することにつながるかもしれないからです。このように、アラスのいうアナクロニズムは、たんなる抽象的な理論というだけではなく、芸術作品の修復といった具体的な問題にも、一考に値する問いを投げかけるものなのです。

(文責 武田宙也)

## 『ロシア語入門』

担当 山下大吾

山の学校初となるロシア語クラスが、お一方の受講生を迎えて今学期開講致しました。受講生の T さんはロシア語に限らず詩を愛好されており、なるだけ原典に親しまれたいとのご希望でしたので、教科書としてナウカ出版の井桁貞義著『名作に学ぶロシア語：初歩から講読へ』を採用しました。この教科書の例文はごく短いものを含め全てロシア文学の原典から採られており、未だごく初歩の段階ですが、個々の文法事項を確認しながら、トゥルゲーネフの『散文詩』やチェーホフの『かもめ』からの印象深い一節をご一緒に味わうことが出来ました。教科書のタイトル通り、授業の内容が「講読」レベルになる日を待ち望みつつ毎週楽しく授業を行っております。

(文責 山下大吾)

## 『ラテン語初級文法』

### 『ラテン語初級講読』(A・B)

担当 山下大吾

今学期の「初級文法」クラスでは、新たな趣向として、以前このクラスを受講された O さんのご希望に沿う形で、*Wheelock's Latin* という英語で書かれた代表的なラテン語入門書で学習を進めております。この入門書には、初歩の段階から、オリジナルの作品を基にした短い文章に数多く取り組んでいくという特徴があります。浩瀚な本ですので全体を読み通すだけでも十分ですが、ある程度進んだ段階で原典に触れ、「あの時読んだな」と振り返る喜びも期待できる構成になっています。この他従来の中利光著『ラテン語初歩 改訂版』を教科書にした、一学期三箇月でラテン語文法の基礎を固める速習コースも引き続き受講生を募集中です。

「初級講読 A」クラスでは、前学期に引き続きキケローの代表的な弁論である『カティリーナ弾劾』を読み進めております。受講生は変わらず A さんと H さんのお二方です。キケローのカティリーナに対する舌鋒は鋭さを増すばかり、当の相手であるカティリーナの心中やいかばかりかといふ勘ぐりたくなります。またキケロー自身や元老院にとって不利な事柄を予め敢えて取り上げ、ごく自然な形でカティリーナが劣勢となり、自発的に亡命せざるを得なくなるよう論を展開していく能力にはやはり感服せざるを得ません。門地に依らず、弁論の力のみで身を立ててきた *novus homo* としてのキケローの生き様をここに認めることができるでしょう。今学期中には第一演説を読み終え、引き続き第二演説に取り組む予定です。

「初級講読 B」クラスでは、前学期まで受講下さった C さんと入れ替わる形で、T さんお一方とご一緒に、キケローの哲学的対話篇『老年について』を読み進めております。新たな受講生をお迎えし、仕切り直しということで、再び作品冒頭からの講読です。西洋古典に限らず、一般に古典として認められるものの特徴の一つに「再読に耐えるもの」という評価が挙げられます。様々な人々に世代を超えて読み継がれて来たこと自体その一証左と言えるでしょう。以前感銘を受けた個所に再び出会い、見落としに気付かされる。過去の自分との幾分気恥ずかしい邂逅、これも古典の持つ魅力の一つなのかも知れません。

(文責 山下大吾)

## 『ラテン語初級講読』(C)

担当 前川 裕<sup>ゆたか</sup>

このクラスでは、セネカ『ルキリウスへの手紙(倫理書簡集)』を継続して読んでいます。今学期は第43書簡から読み進めています。受講生はお二人で、準備時間や力量を考慮しつつ、適宜書簡を選択して読んでいます。授業では本文を読んで訳をするというオーソドックスなスタイルです。音読をすることで、母音の長短に体が慣れていくことも意識しています。また基本的な文法事項を随時チェックしながら、知識を確認しています。内容についての話も深めながら、意見交換をしています。お二人とも京都市外から来られていますが、予習をされて山の学校まで通われています。

セネカの書簡は、まるで現代に書かれたかのように読めるところすらあります。第44書簡には「人はどこから来たかではなくどこへ行くかで決まる」という言葉が見られます。当時のローマで重んじられていた家系や出自を重んじる社会に対して、個人の価値を重視した言葉ということが出来ます。全ての人が未来に開かれている言葉として、山の学校にふさわしいものだと思います。

この授業では、一回につきロウブ(ラテン語原文)のテキストで16行程度を1時間弱で読みます。80分の授業時間ですと少し余りますが、そこではおまけの話をしています。西洋古典に関する日本語書籍や洋書の紹介や、ラテン語の周りの話をしていきますラテン語やローマ時代に関する書籍類については、山の学校の蔵書にもなっていますのでご自由にご覧ください。

次学期も引き続きセネカの予定です。初級講読は、初級文法修了程度(独学でも構いません)でご参加でき、参加者に合わせた進度で進めます。興味を持たれた方はぜひご連絡ください。

(文責 前川 裕)

## 『ラテン語入門』『ラテン語中級講読』

担当 広川直幸

入門では、Hans H. Ørberg, *Lingua Latina II: Roma aeterna* を教科書にしてラテン語を学び続けています。受講生の粘り強さのおかげで、今学期で三年目が終わり、来学期から四年目に入ります。教科書の初めの部分は学習者に配慮してリーウィウスを書き改めて読みやすくしたものが主なテキストになっています。書き改められてはいますが、かなり手強いので、いろいろと工夫をして、よく復習してください。

中級講読では、ウェルギリウスの『アイネーイス』を読んでいきます。Clyde Pharr, *Vergil's Aeneid: Books I-VI* を使って、ゆっくりとしたペースで進んでいます。とはいえ、塵も積もれば山となるので、地道に読み続けて行きましょう。

(文責 広川直幸)

## 『ギリシャ語入門』(A・B)

## 『ギリシャ語初級講読』(A・B)

担当 広川直幸

入門Aでは引き続き Peckett & Munday, *Thrasymachus* を教科書に古典ギリシャ語の基礎を学んでいます。この春で二年目に入りました。教科書も三分の二が終わり、残る重要文法事項(形態論)は完了時制と不規則動詞だけです。頑張りましょう。

入門Cは一学期お休みしたので、昨年度の秋学期の続きです。水谷智洋『古典ギリシア語初歩』を用いて学んでいます。今学期は第13課から第24課まで進みます。

初級講読Aでは「マタイによる福音書」を読み終え、『オデュッセイア』を読み始めました。この授業で韻文を読むのは初めてなので、今は韻律に悪戦苦闘といった感じですが、叙事詩の韻律分析に必要な考え方はもう出尽くしました。後はひたすら分析して朗読する練習をして体にリズムを刻み込むだけです。それができれば、朗読することに喜びを感じるようになるでしょう。

初級講読Bでは、今学期から Louise Pratt, *Eros at the Banquet* を用いてプラトンの『饗宴』を読んでいます。『饗宴』は抜群に面白い本なのですが、いかんせん過剰に用いられる間接話法のせいで初学者には難解であるという悩みがあります。今回採用した教科書はその点を考慮して前半三分の一を易しく書き改めています。それ故、厳密には原典講読とは言えないのですが、初級文法を終えた段階では、このようなステップを踏むのもよいかもしれません。

中級講読では、トゥーキューディデースを読んでいきます。この原稿を書いている時点で第一巻の終わりが目の前です。第一巻の最後に近い部分で、スパルタのパウサニアース、アテーナイのテミストクレースという、ペルシャ王と手を組んでギリシャ世界を征服する野望を抱いた二人の将軍の末路が、史家特有のいつもの濃密でゴツゴツとした文体ではなく、余裕のあるのびのびとした筆致で隣り合わせに記されているのが印象的です。二巻でようやくペロポネソス戦争の叙述が始まりますので、これからが本番といったところです。

(文責 広川直幸)

	午前(9:10-15:30)	1(16:20-17:20)	2(17:30-18:30)	3(18:40-20:00)	4(20:10-21:30)
月	将棋道場(p11) (月1回 16:00~18:00)	つくる3~6年(p4) (16:30~18:00 隔週)	漢文入門(p12) (17:00~18:20)	イタリア語講読(p13)	ラテン語入門(p15)
火		しぜん A(p2) かいが A(p3) (15:50~17:20 隔週) かず1~2年A(p6)	ことば2~4年(p5) ことば6年(p4)	中学ことば(p5) ギリシャ語入門 A(p15)	中学・高校英語(p5) ギリシャ語初級講読A(p15) 調査研究入門(p9)
水		つくる1~2年(p4) ことば1~3年(p5) かず5年 A(p8) 山の学校ゼミ(社会)(p12) (16:00~17:20)	かず1~2年B(p8) ことば5年(p4) かず5年 B(p6) (17:45~18:45)	高校英語(p8)	中学数学(p8) 歴史入門(高校)(p5) ラテン語初級講読 A(p14)
木	ラテン語初級講読 B(p14) (14:10~15:30)	しぜん B(p2) かいが B(p3) (15:50~17:20 隔週)	ウェブプログラミング入門 (17:10~18:30 隔週)	中1~2年英語(p8) ギリシャ語入門 C(p15)	高校数学(p8) ラテン語初級文法(p14)
金	ロシア語入門(p14) (14:30~15:50)	ことば4年A(p4) ことば4年B(p6)	かず4年 A(p7) かず4年 B(p6)	中学理科(p10) ギリシャ語中級講読(p15)	ロボット工作(隔週)(p9) ユークリッド幾何(隔週)(p9) ラテン語初級講読 C(p15) ラテン語中級講読(p15)
土日	英語一般(p8) (土 10:00~11:20) フランス語講読(p13) (日 9:10~12:00 隔週)	ギリシャ語初級講読 B(p15) (第2・4土 14:00~17:00 隔週)			

スケジュール

○印…しぜん・ユークリッド \*印…かいが・ロボット ▽印…つくる  
※印…ギリシャ語初級講読B #印…フランス語講読 (隔週クラス)

	月	火	水	木	金	土	日
8・9月	8/27 ▽(1)				8/31 ○(1)	9/1	9/2 # (1)
	9/3	4 ○(1)	5 ▽(1)	6 ○(1)	7 * (1)	8 ※(1)	9
	10 ▽(2)	11 * (1)	12	13 * (1)	14 ○(2)	15	16 # (2)
	(17休)	18 ○(2)	19 ▽(2)	20 ○(2)	21 * (2)	22 ※(2) 「秋分の日」ですが 授業があります	23
	24 ▽(3)	25 * (2)	26	27 * (2)	28 ○(3)	29	30 # (3)
10月	1	2 ○(3)	3 ▽(3)	4 ○(3)	5 * (3)	6	7
	(8休)	9 * (3)	10	11 * (3)	12 ○(4)	13 ※(3)	14 # (4)
	15 ▽(4)	16 ○(4)	17 ▽(4)	18 ○(4)	19 * (4)	20	21
	22	23 * (4)	24	25 * (4)	26 ○(5)	27 ※(4)	28 # (5)
	29 ▽(5)	30 ○(5)	31 ▽(5)				
11月				1 ○(5)	2 * (5)	(3休)	4
	5	6 * (5)	7	8 * (5)	9 ○(6)	10 ※(5)	11 # (6)
	12 ▽(6)	13 ○(6)	14 ▽(6)	15 ○(6)	16 * (6)	17	18
	19	20 * (6)	21	22 * (6)	(23休)	24 ※(6)	(25予備日)
	26	(27予備日)	(28予備日)	(29予備日)	(30予備日)		

~8月のイベントのご案内~

- ・20日(月) 16:00~18:00 『将棋道場』
  - ・21日(火) 16:00~18:00 『ひねもす道場』
  - ・22日(水) 9:30~11:30 『かるた大会』
  - ・23日(木) 16:00~18:00 『ロボット工作』
  - ・24日(金) 16:30~18:00 『漢文のタベ』
  - ・24日(金) 18:30~20:00 『ラテン語のタベ』
  - ・25日(土) 9:30~11:30 『オセロ教室』
  - ・25日(土) 16:30~18:00 『舞踏のタベ』
  - ・25日(土) 18:30~20:00 『建築のタベ』
- 詳細は別紙 イベント案内 をご覧ください

~夏期講習のご案内~

詳細は FAX または Email でお尋ね下さい

- ・『中学生・高校生』 8/7~8/10・8/21~24の17:10~21:30
- ・『調査研究入門』(応相談) 8/11・8/25の9:00~12:00(予定)
- ・『英語一般』(応相談) 8/4・8/18の9:00~12:00(予定)
- ・『ギリシャ語講読』 7/14・7/28・8/11・8/25の14:00~17:00
- ・『ラテン語講読』 7/22・7/29・8/5・8/19の14:00~17:00
- ・『格言で学ぶラテン語入門 A(京都)』 7/21・7/22の9:00~12:00
- ・『格言で学ぶラテン語入門 B(東京)』 7/29の13:00~17:00
- ・『格言で学ぶラテン語入門 C(京都)』 8/18・8/19の9:00~12:00

LOOK!

——本誌を手にとり下さった方へ

山の学校は、小学生から大人を対象とした新しい学びの場です。  
"Disce libens. (楽しく学べ)" がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです(春学期は6月、秋学期は11月、冬学期は2月)。ホームページでも、クラスの様子やイベント(毎月開催・無料)の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕方がない!もし、そうした気持ちを本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで

TEL: 075-781-3215

FAX: 075-781-6073

E-mail: taro@kitashirakawa.jp

http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko

